

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 70

2018年 11月



平穏な時のガザの美しい港。奥に見える青い海は地中海。

ガザの情勢が最近また緊迫しています。イスラエル軍特殊部隊によるハマス幹部殺害の報復として、ガザから370発以上のロケット砲弾がイスラエル領土内に撃ち込まれました。それに対しイスラエル軍がガザ中心部の市街地まで激しい空爆を繰り返し、双方で犠牲者が出てしまったのです。今夏のプロジェクトにガザから参加したラミ・アルジェルダ (p.2 参照) に、電話で話を聞くことができました。彼の住む町の中心地では瓦礫が散乱し、学校はおろか、公共施設や行政、NGOさえも活動を一時ストップ、外出もままならないとのこと。「初めてではないから全然驚いてはいない」と言いながら、「希望の道は見えない、今はあきらめるしかない。日本での平和な生活が懐かしい」とため息をついていました。

11月15日、エジプトの仲介により停戦合意が成立したもののそれも暫定的。イスラエルとパレスチナに、そして世界中の紛争地に、真の平和が一日も早く訪れますように!

理事長 井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター (JANIC) によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野 (組織運営・事業実施・会計・情報公開) について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 **Email** ispalejpn@gmail.com **TEL/FAX** 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>

ガザから日本への旅：片道10日間！

ラミ・アルジェルダ（平和の架け橋プロジェクト2018参加者）

私は2018年8月の《平和の架け橋プロジェクト》に参加するべく、2018年2月に応募し、幸い私は選ばれた。パレスチナ人、イスラエル人、日本人が互いに話し、聴き、学び、議論さえもするすばらしいチャンスを与えられたのだ。このプロジェクトのガザからの参加者は、初めてだとか。ほんとうに嬉しかった。

8月1日、とうとう日本へ出発する日が来た。封鎖をされているガザから外の世界に旅するには二つの道しかない。一つは北のエレッツ検問所を通過してイスラエル経由ヨルダンへ、もう一つは南のラファを通過してエジプトへ行く道である。（後者は最近開かれた検問所で、いくつも非常に厳しい難関がある。）

前者の方が容易なのだが、残念なことに今回はその検問所を通る許可がイスラエル治安当局から出なかった。私にとっていちばん辛い時だった。6カ月もこの日を楽しみに待っていたのだから。

私は必死で他に可能性はないかと探してみた。その結果、たった一つの方法は、私の名前をエジプト行きの旅行者リストに入れてくれるブローカーにお金を払うことだった。しかしこれは簡単にはできず、いろいろな交渉をしているうちに、日本ではプロジェクトは始まっていた。ブローカーとの交渉成立まで数日間、ラファの検問所で待たされること2日間、エジプトのカイロに着くまでに、丸4日間、それからドバイへ、そしてやっと東京に到着することができた。

プロジェクト開始からすでに10日が過ぎていた。それでも私は8月15日の深夜、ようやく東京JICAに来ることができたのだ！

翌朝、私はみんなに会うことができた。最高に嬉しい心温まるひとときだった。みんな私を待っていてくれたし、本当に熱心に私のことやガザのことを知ろうと耳を傾けてくれた。

今まで私はイスラエルの人と、互いの紛争について話したことはなかった。それどころか他人の前で平和や協力についての私の考えを話したこともなかった。



長い旅の末、やっと新宿に到着したラミ（中央）

しかしプロジェクトでは、ガザでの紛争について私の意見を他の人に、特にイスラエル人参加者に伝えることができ嬉しかった。私も彼らから、紛争にはいろいろな種類があり、その解決方法にもさまざまな方法があることを習った。他のメンバーからそれぞれの紛争体験や思いを聴いたが、それは私が想像していたものとは全く違っていた。互いにこれほど異なっているのに、同じ人間として認め合い、共に座って本音で語り合えば、友だちとなれることを体験した。

パレスチナでもイスラエルでもない、日本で行われるプロジェクトは格別だった。平和、言論の自由、安心・安全があるこの国だからこそ私たちは本心で話し合うことができたからだ。

ガザには安全がない。爆発音や砲撃音や戦闘機の爆音などは日常茶飯事、もうそんなものには慣れっこになっていると思っていた。ところが、東京のある駅にいた時、電車が突然大きな音をたてて通り過ぎていった。一瞬はとした私は爆発が起こったと思って身構えたが、すぐそうではないとわかって思わず笑い出してしまった。まわりの人は私がなぜ笑っているのか理解できず、いぶかしげに私を見つめていた。

私は、日本滞在を延長し、京都や奈良を訪ねて日本の文化を堪能した。また常陸太田では日本一高い(100m)のバンジー・ジャンプをして、ガザでは絶対に味わえないスリル感を楽しんだ。私の生涯最高の体験だった。

ガザへ帰る時が来た。帰路にはなんと6日もかかり、疲れ果てた。もっとも不運だったのは、カイロ空港に到着した日、私が通るべきラファ検問所が突然閉鎖されてしまったことである。エジプトはただのトランジットと思っていたので、入国ビザを持っていなかった。それで私は当然、「不法滞在者」ということになり、丸2日間、空港の狭い「拘留所」に閉じ込められてしまった。電話も取り上げられてしまい、日本にもガザにも連絡できなかつたし、着替えもシャワーも許されなかつた。そして、やっと検問所が開いて、解放されたが、あと2日間もバスで砂漠の道を走って、ようやくガザの我が家にたどり着いた。

往復の旅は、こんなに大変だったけれど、苦しい出にはならない。日本での体験は本当にすばらし

かつたからだ。

私がプロジェクトに参加できたのは、実質的には3日間だけだったが、ガザでの生活や平和や紛争解決に関する私の考えや思いを伝えることができたし、私自身多くのことを、多様性に富んだ参加者から学ぶこともできた。

私はこれから、ガザの家族、友人や知人に、プロジェクトのこと、すなわちイスラエル人やイスラエル国籍のアラブ人、パレスチナ人、日本人との交流体験を伝えたいと思う。たくさんの友だちもできた。彼らとはSNSでこれからもつながっていけるだろう。

私は、もしみんなが平和を信じ、互いの存在を認め合うことができれば、変化が訪れると確信している。

平和を願うパイプオルガンの響き ——ヤクーブ・ガザウィ コンサート

平和の架け橋プロジェクトを終えた9月、当法人の現地スタッフであり、エルサレム・聖墳墓教会の首席オルガニストも務めるヤクーブ・ガザウィのコンサートを、3回開催することができました。

- 1) 仙台・カトリック元寺小路教会 (9月2日)
- 2) 目黒・聖パウロ教会 (9月13日)
- 3) 横浜・カトリック山手教会 (9月16日)

3会場でのお客様は延べ450人、パイプオルガンの華やかな調べとともにイスラエルとパレスチナ、そして世界の平和に思いを馳せるひとときを一緒に過ごしました。

皆様から、三つの教会合わせて約45万円の献金をいただきました。必要経費を差し引

き、聖地の子どもたちの教育に使わせていただきます。

コンサート開催を快く受け入れてくださった三つの教会、また広報や演奏会の運営などでさまざまにご協力くださったお一人おひとりに心から感謝いたします。演奏者ヤクーブからも感謝の意をお伝えいたします。

井上 弘子



聖パウロ教会でのコンサート。由緒あるオルガンの美しい響きは聴衆を魅了した。

架け橋を妨げる負の連鎖 断ち切るカギは

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

イスラエル、パレスチナの若者を日本に迎え、日本の若者も交えて交流を図る「平和の架け橋」プロジェクトが今夏も、長野の善光寺宿坊での「合宿」などを中心に実施されました。リーダーを含め9人のイスラエル、パレスチナ人グループのうち、パレスチナ人は3人、イスラエル国籍のユダヤ人4人、イスラエル国籍のアラブ人2人でした。

イスラエル人とパレスチナ人が現地で交流する機会は、現在ではごく稀といってよく、顔を合わせるのは居住区を出入りするパレスチナ人をイスラエル兵がチェックする検問所ぐらい、とさえ言われる状況です。国許を離れた日本という地は交流を可能にする場であり、その意味で今年のプロジェクトもさやかではあれ、目的を果たしました。もちろん、その裏には参加者それぞれの負の思いもあります。「架け橋」を築いていくには、負の連鎖を断ち切っていかなければなりません。

微妙なユダヤ・アラブ共存

イスラエル国籍のアラブ人のことは、前号の記事「ユダヤ人とは？イスラエル永遠の課題」で触れました。「ユダヤ人のホームランド」を目指したイスラエル建国ではあったものの、第1次中東戦争後に引かれた境界線内に、元々住み着いていたアラブ人を抱え込んだため生じたものです。

彼らの立場は微妙なものです。国籍はイスラエルですが、ユダヤ民族の象徴「ダビデの星」をあしらった国旗や、「ユダヤ人の魂」をうたった国歌を自分たちのものとして掲げ、歌うことには抵抗がある、というより、できないことでしょう。そんな中でも、ユダヤ、アラブ双方に仲良く共存することを目指す活動は続いてきました。プロジェクト参加者のうち、ユダヤもアラブも、そしてユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒が普通に共存しているというイスラエル北部の町から来たアラブ人のAさんは「小さい時から異なる暮らし・文化に接してきたから、多様性というものを自然に受け入れてきた」と語ります。

しかし、共存とは逆の動きもあります。今年7月19日、イスラエル国会は「イスラエルではユダヤ人のみが民族自決権を持つ」などを内容とする『国民国家法』を可決しました。この法律はヘブライ語を公用語と定め、アラビア語を公用語からはずして「特別な地位」に格下げすることもうたっており、イスラエル人口の約5分の1を占めるアラブ人だけでなく多くのユダヤ人市民からも「アパルトヘイト（人種隔離政策）を合法化するものだ」と猛反発を受けました。

イスラエル国会にはパレスチナ国家建設に反対し、アラブ排斥を公言する政党や議員もいます。右派の支持を取り込んで政権を維持するネタニヤフ首相の下で、こうした言動を容認する風潮が強まっているようです。別のプロジェクト参加者でアラブ人のBさんは、文化や宗教などが異なる人々との交流は、違いを受け入れることを学ぶ良い機会だと語っていました。ただし、プロジェクトスタッフとの本音の会話では、親しくなれそうになったユダヤ人や仕事先のクリニックで接する患者が、彼女の素性を知ると態度を変えるという経験をする、と語ったそうです。

希望を失うパレスチナ人

パレスチナ人参加者のうち、初めてのガザ出身者であるCさんは、イスラエル軍の攻撃で多くの同胞が犠牲になっている紛争の地に住みながら、彼自身にはさほどの切迫感がないような印象を与えたようです。むしろ、ガザを実効支配するイスラム教原理主義組織ハマスの軍事路線に批判的で、イスラエルが攻撃してくるのも無理ないという口ぶりだったとか。それは、彼がキリスト教徒で、圧倒的多数派のイスラム教徒の中で異色の存在であることの影響があるかもしれません。それでも、イスラエルに封鎖されたガザで生きるパレスチナ人としての苦悩は、生命の危険、就職難、医療その他生活の基本条件の欠如など想像以上です。それは、日本に来

て帰るだけで過酷な目に会った彼の体験記(本誌別稿)からもうかがえます。

同じパレスチナ人で、イスラエルがエルサレムを「不可分の自国の首都」として併合を宣言した東エルサレムに住むDさんは、パレスチナ人であることに絶望感を抱き、イスラエルの市民権を得たいと願うまでになっています。彼はプロジェクトスタッフに対し、イスラエルが管理する社会で様々な権利が制約されるパレスチナ人として生きる負担の大きさに、我慢ならないと語りました。

イスラエル市民なら、検問での検査で長い時間待たされることもありません。些細な理由で家の建築許可が得られないということも、医療や教育のサービスを受けにくくなることもありません。とはいえ、イスラエル市民権を請求して認められた東エルサレムのパレスチナ人は、1994年からの20年間では7千人余りの請求に対し36.8%だったのが、2015年の統計ではわずか2.9%に減っています。望み薄といえるでしょう。

ユダヤ人にもトラウマ

一方、イスラエルのユダヤ人参加者からは、現在の境遇にかかわる苦悩や不安の声はあまり聞かれなかったそうです。あからさまなイスラエル寄り政策をとる米トランプ政権から、エルサレムを自国の首都とする主張を認めてもらい、国際法では違法とされるヨルダン川西岸の占領地への入植を支持してもらうなど、イスラエルはパレスチナ側に対し政治的に圧倒的な優位に立っています。また、分離壁や電気柵でパレスチナ人を自治領域に封じ込め、テロやロケット攻撃があると徹底的に反撃する圧倒的な軍事力で治安面の不安も小さなものです。そのため、イスラエルのユダヤ人には今、テロに怯えるなどの目に見える不安は少ないでしょう。

9月末に公開されたイスラエル映画『運命は踊る』は、イスラエル人の主人公が、兵役中の息子の戦死を知らされ、後にそれが誤報だったことに続く物

語を通して、建国以来続いてきた戦争、兵役などの緊張から解放されないイスラエルのトラウマを描いています。

パレスチナ人やイスラエル国籍のアラブ人のように、背負っている負の環境が見えやすいと、その苦境・苦悩も語りやすいものです。それに比べ、現在は生存権が脅かされているようには見えない側には、どんな不安や苦悩があるのか見えにくく、内面の葛藤のようなものがあっても、それは表現しにくいでしょう。この映画は、それをあぶりだしているように思います。

監督のサミュエル・マオズ氏は、朝日新聞夕刊文化欄(9月28日)の記事によると、「我々はホロコーストや戦争のトラウマにとらわれ、変化を恐れるあまり平和にも背を向けてきた。自ら敵を作り出し戦い続けてきた結果、今も負の連鎖が続いている」と指摘しています。イスラエル社会全体が「強くあらねば」ととらわれ過ぎている、というのです。監督は別のメディアでのインタビューで「次世代に向けてよりよい社会を作っていくための必要最低条件は、社会が自己批判をちゃんと受け入れるということだと思います」とも語っています。

和平には妥協が必要です。特に、優位に立って譲歩の余裕がある側の妥協の姿勢が求められます。「強くあらねば」という『とらわれ』から解放されたなら、交渉に臨む姿勢も変わるのではないのでしょうか。

認定NPO法人聖地のこどもを支える会の 会員になりませんか?

さまざまなプロジェクトをはじめ、教育支援事業など、当会の活動を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員	個人	年額 12,000円/1口
	学生	年額 6,000円/1口
サポート会員		年額 6,000円/1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

パレスチナで1か月半を過ごして

池上 遥 (ヨルダン川西岸地区 ジェリコ在住)

国際協力機関から派遣された夫のパレスチナ駐在を機に、今秋より生活の拠点をエルサレムに移した池上遥と申します。諸事情により、9月半ばの駐在開始後、最初の1~2か月は、エルサレムではなく、パレスチナの西岸地区で生活することになったため、現在は、ジェリコという世界最古かつ世界で最も標高が低い都市に住んでいます。

駐在が決まるまでは、この地域について知っていることと言えば、ガザ地域での紛争くらいで、「パレスチナ=危険な地域」というイメージを持っていました。しかし、西岸地区で生活してみると、そのイメージはすぐに払拭されました。住み始めてから1か月半が経とうとしていますが、日々、パレスチナに対する愛着は増すばかりで、楽しい毎日を過ごしています。とは言え、初めての中東、また、パレスチナの文化に驚かされることもあります。

今回は、これまでの滞在で感じた私の「喜怒哀楽」に沿って、パレスチナでの生活の所感をお伝えしようと思います。

《喜》

パレスチナ人は、非常に親切で、おもてなしの精神を持っています。日本でも心温まる経験はしてきたものの、こちらでは、人々の温かさに心打たれる瞬間に幾度となく遭遇します。

例えば、道に迷っていることを察して、こちらから尋ねなくても、誰かしらが声をかけてくれ、行きたい場所まで連れて行ってくれます。また、仲良くなるとすぐに自宅に招待してくれ、美味しいパレスチナの家料理をふるまってくれます。この素晴らしい精神の背景にあるのは、弱い人の立場に立って物事を考えるイスラム教の教えにあると聞いたことがあります。道端にホームレスがいなくてもこの教えがあるからで、親族の中に貧しい人がいれば、当然のように裕福な人が養うそうです。

《怒》

パレスチナ人は依頼事項を二つ返事で引き受けて

くれます。しかし、にわかには信じがたいスピードで交わした約束を忘れることがあります。

先日、知り合いのタクシードライバーに送迎を電話でお願いし、数回、ピックアップの時間と場所を確認しました。しかし、いくら待ってもタクシーが来ないため、確認の電話を入れるも応答せず、結局コールバックもありませんでした。

このような無責任な行動を象徴する単語として「インシャラー」というアラビア語があります。これは、トリッキーな単語で、直訳すると「神の御心のままに」ですが、時として、「問題が起きても神様の示すことゆえ、私に責任はない」ということを意味します。おそらく、このドライバーも「迎えに行くと思うけど、行けなくてもそれは神様の思し召しだから仕方ない」という具合だったのでしょう。

インシャラーの被害にあわないよう、先回りしながらパレスチナ人には何かを依頼しようと決意した出来事でした。

《哀》

パレスチナ人と会話していると、頻繁に「occupation (イスラエル人による占領)」という単語を耳にします。実際、パレスチナ人はイスラエル人によって不平等な扱いを受けています。

例えば、イスラエルとパレスチナ間を移動できる場所には、イスラエル軍の検問所が設置されています。基本的に、西岸地区に住むパレスチナ人はこの検問所を越えてイスラエル領土に入ることができず、イスラエル領土に入るための特別な許可を得た場合でも、執拗なほど厳重なチェックを受けます。彼らはエルサレムのすぐ近くにいるにもかかわらず、特別な許可を得ない限り、聖地を訪れることができないのです。イスラエルによって自由を奪われている彼らの怒りや苦しみは、計り知れません。

先日、テルアビブというイスラエルの中心都市を訪れた際、美しい地中海ビーチやおしゃれなカフェを久しぶりに目にしました。私の好みのテイストで

はありましたが、車で2時間走った先にいるパレスチナの友人のことを思うと素直に喜べない自分がありました。この発展の裏側にどれほどの哀しいストーリーがパレスチナにあるのか。

イスラエル・パレスチナ問題は、出口の見えない複雑な問題ですが、私には一体何ができるのだろうか？ と日々、考え続けています。

《楽》

パレスチナには、特に歴史や宗教に関心がある人にはたまらない魅力があります。

例えば、ジェリコは世界最古の都市と言われているだけあり遺跡や、聖書にまつわる名所が多数あります。また、死海が目視できるほど近くにあり、気軽に死海で遊べるのも魅力的なポイントです。ジェリコは、10月下旬でも日中は半袖で十分なくらい暑いですが、キンキンに冷えた搾りたてのレモンミントジュースでのどを潤しながら、歴史や自然を体感し

てみてはいかがでしょうか。

2～3年は駐在する予定のため、私で良ければいつでもご案内します！



ジェリコ内にあるワディ・ケルトという渓谷の絶壁に、聖ゲオルギウス修道院（ギリシア正教）が建てられています。



パレスチナでは、気軽に道端やカフェでフレッシュジュース（主にオレンジ、レモンミント、ザクロ）が飲めます。



2019「平和を願う対話の旅」スタディ・ツアーのお知らせ

イスラエル、パレスチナを訪ねて、聖地と世界の平和を考えるツアー「平和を願う対話の旅」、2019年も実施します！

支援者・里親の皆さま、支援して下さっている子どもたちに会いにいらっやいませんか？「聖地の子どもたちの今」を見てやってください。



【プログラム】 エルサレム、ベツレヘム、テルアビブで、現地の子どもたち、青年と交流。学校や各種施設を訪問。難民キャンプ、分離の壁、検問所の見学、死海観光など。学生は各地でホームステイも体験します。

期 間：2019年2月27日（木）～3月10日（日）
【12日間】（予定）

参加費：約350,000円（おとな）
約290,000円（学生）

お申込み期限：2018年12月15日

お問合せは当法人事務局へ TEL 03-6908-6571 または 090-6538-3255
E-mail ispalejpn@gmail.com

仙台・元寺小路教会でのオルガンコンサート
左：弾き終えてほっと一息。
右：演奏に聴き入る方々。観客の後ろに演奏席。



ラマラで出会った子どもたち ヨルダン川西岸地区最大の町ラマラの小学校、中学校の子どもたちです。
(バナット・スクール、フレンズ・スクール、聖ヨゼフ学院)



写真撮影
ダリーヌ・ラマ、
ラミ・アルジェルダ、
池上 逢、
佐藤 克裕、
井上 弘子、
浅野 耕二